# 博 士 学 位 論 文 要 約
Summary of Doctoral dissertation

論 文 題 目：

キリスト教弁証の課題としての教会論：
大木英夫神学に対するS.ハワーワス、J.H.ヨーダー、H.ナウエンの意義

氏　　名：　徳田　信

要　　約：

第一章では序論として本論文の目的が示される。その目的とはすなわち、現代日本でキリスト教を弁証していくためには教会の共同体性の涵養が必要であると示し、その共同体性の内実を規範的に明らかにすることである。またそのために、「日本はピューリタニズムの教会を必要とする」（以下、大木テーゼ）に要約されうる大木英夫の弁証的神学を補完・修正するものとして、スタンリー・ハワーワス（Stanley Hauerwas)、ジョン・ハワード・ヨーダー（John Howard Yoder)、ヘンリ・ナウエン（Henri Nouwen）それぞれの神学思想に取り組むことの意義が確認される。

第二章では、大木テーゼを支える大木の「歴史神学」（歴史の意味を問う神学）の構造と意義、そして課題が検討される。大木は、自らの敗戦経験とキリスト教入信経験を踏まえ、日本国憲法で保障されている人権とデモクラシーについて、それがアメリカ経由でもたらされたピューリタン由来のキリスト教文化価値であると主張する。そして、この歴史―社会的連関を踏まえるならば、現代日本が制度的に享受している人権とデモクラシーに精神的内実を与えるのはキリスト教、それもピューリタニズムであると主張する。かかる「歴史神学」によって大木は、キリスト教内外に向けてピューリタニズム・キリスト教の弁証を試みた。日本は「大きな物語」としてのキリスト教社会を経験したことはないが、この「歴史神学」の視座は、プロテスタント・キリスト教を日本の社会制度的・教会的脈絡で受け止める土台（物語）となり得る。そこに大木の「歴史神学」の積極的意義がある。

しかし大木の神学構造やピューリタニズムには幾つかの課題もある。たとえば大木は教会の必要性を論じつつも、その教会理解は一種観念的である。それは、神の国の「いまだ」を歩む一般社会と区別されるべき、神の国の「すでに」を体現する共同体として教会が位置づけられていないからである。そしてその問題性は、教会的主体性に根差した平和神学の未展開において表れている。アジア太平洋戦争期、軍国主義に取り込まれた面がある日本の教会にとって、平和の道をキリスト教独自の立場から示すことは弁証的意義がある。しかし大木神学は、その師ラインホールド・ニーバーの神学と共に、戦争を原理的に容認する構造となっている。

またピューリタニズムの課題として、それが個々人の信仰的主体性を確立せしめる一方で、主体的個人として生き得ない弱さを等閑視していることが挙げられる。その問題性

は、たとえば重度知的障がい者の教会加入において顕わとなる。加えて、ピューリタニズムもその中に巻き込まれているところの近代西欧の神学一般に見られる知性偏重の問題がある。一種のインテリ宗教として始まったピューリタニズムは独自の敬虔を育んだが、その敬虔（霊性）に身体性は希薄である。「活字離れ」と既存の制度的宗教に対する不信が進む現代、キリスト教を日常生活の次元で経験・体感し得るものとして提示することが必要とされている。

以上の大木神学やピューリタニズムの課題、すなわちキリスト教独自の平和論、「弱さ」の意味付け、身体性を伴う霊性の欠如に対して処方箋を示しうるのが、ヨーダー、ハワーワス、ナウエンの思想である。ジョージ・リンドベックの「言語―文化的アプローチ」や物語神学に連なるハワーワスは、教会が固有の実践を伴った共同体の生を営むことによって、真に社会に貢献できると主張する。その貢献とは、この世界が見失いがちな共同体の生、すなわち自他が晒されている弱さを受け止め、平和の基となる非暴力のライフスタイルを証言することである。そしてこれらのテーマはヨーダーやナウエンにおいても展開されている。そのことを踏まえ、次章以降で彼ら北米の思想家たちの議論が順次検討される。

第三章では、ヨーダーの平和神学を軸に検討され、それによって、「日本のキリスト教は自らの内に平和を生じさせる必要がある」ことが明らかにされる。ヨーダーは、大木と同じく自由教会に神学的意義を見出しながらも、ピューリタニズムではなく自らの属する再洗礼派（メノナイト派）の伝統、すなわち平和主義再洗礼派の信仰的遺産に注目する。ここでは、大木やニーバーが奉じる一種の正戦論である「キリスト教現実主義」と対比させつつ、非暴力倫理やそれと不可分なものとして展開された教会論が検討される。

そこで明らかにされるのは、「平和」をキリスト教独自の意味で再定義する必要性である。すなわち、特殊にキリスト教的な確信に立つところでは、平和とは、非暴力で十字架に向かったイエスに従おうとする結果として現れるものであり、イエスの道を共に歩もうとする共同体の生においてこそ認識し得る。それは、キリスト教外部に対しては信仰者共同体としての教会への参加の招きとなり、キリスト教内部に対しては特殊にキリスト教的な確信に生きる共同体であるようにとの促しである。

ヨーダーの再洗礼派的視座はピューリタニズムの課題を照射する。ピューリタニズムの神学的核であるカルヴァン主義は、ヨーロッパで長らく国教的立場に関わり、アメリカでは市民宗教の立場を得てきた。こうした国教的ないしは市民宗教的キリスト教は、ヨーダーが名付けるところのコンスタンティヌス主義へと傾き、国家の暴力の神学的正当化につながっていく。それはニーバーにも当てはまるが、ヨーダーによると、その根源には終末論の問題がある。神の国の「すでに」と「いまだ」において、ニーバーが後者に重点を置いたことに対しヨーダーは前者に重きを置いた。それはリチャード・ニーバーやカール・バルトの「実現された終末論」や「恩寵の勝利」と称する立場と通底するが、ヨーダー神学の独自性は、赦しと和解の共同体実践を通して代替社会のビジョンを示す教会共同体の姿を提示したところにある。

日本のキリスト教は少数派であり続けているが、ヨーダーが明らかにしたのは少数派であることの強みである。大木は、植村正久など明治初期のキリスト者がピューリタニズムを保持していたことを肯定的に捉える。しかし日本の教会が、ピューリタニズムが内包する多数派への志向に無批判であるとするならば、それ自体コンスタンティヌス主義への転落と言いうる。むしろ日本の教会は、同じく少数派であり続けてきた再洗礼派に目を向けることが求められる。それは俗権に直接影響を及ぼすよりも、共同体実践による「証し」

によって間接的に影響を及ぼすべきことを意味する。すなわち日本のキリスト教は、各教会や教団そして教界全体において、キリストの和解に基づき自らの内に平和を生じさせることが求められる。

第四章では、ヨーダーの平和神学に学んだハワーワスの神学思想が検討される。そこで明らかにされるのは、「日本の教会が弱さに価値を見いだす教会形成を進めるために、物語神学のパラダイムを理解してハワーワスの教会論に学ばなければならない」ことである。ピューリタニズムでは個々人の自覚的信仰を重視し、そのような自覚的・自発的信仰者たちの集まりとして教会を捉える。それは教会の事柄に留まらず、個人主義社会アメリカの型となっている。その場合、キリスト教としての問題は、重度知的障がい者を典型とする「弱者」を教会共同体の十全な成員として位置づけ難いことである。それに対しハワーワスは、神の物語によって先行的に存在してきた共同体として人々を受け入れ、共に支え育む共同体として、教会を規範的に描く。

そのことはハワーワスにおいて教会と倫理が不可分であることをも表す。ハワーワスの倫理学は聖書を軸とした「神の物語」に聴くことを要求するが、そこには礼拝を中心とした教会共同体の営みに参加することを通して自らを形成していくことが含意されている。ハワーワスのかかる教会理解は、障がいの有無にかかわらず偶有性に晒され、根源的に「弱さ」を持つ存在としての人間観を前提している。その場合「弱者」は、ケアすべき存在に留まらず、むしろ他の人々にとって預言者的意義を備えた存在と見なされる。かく教会が弱さに価値を見いだす教会形成を進めるためには、ハワーワスの教会論に学ぶことが求められる。

ただしハワーワスの議論をピューリタン的伝統の教会が受け止めるためには、神学パラダイムの問題に向きあう必要がある。リンドベックの神学類型に照らすならば、伝統的なカルヴァン主義神学が「認知的—命題的アプローチ」に根差していることに対し、ハワーワスの議論は物語神学と通底する「言語—文化的アプローチ」を踏まえている。それゆえ、教会が弱さに価値を見いだす教会形成を進めるためには、物語神学のパラダイムを理解してハワーワスの教会論に学ぶことが求められる。

第五章では、大木神学やピューリタニズム、そしてヨーダーやハワーワスを含む近代西洋神学一般の課題、すなわち神学理論と生き方（霊性）との架橋の問題に取り組むため、ナウエンに取り組む。ナウエンは牧会心理学者でありながら平和のための社会活動も行い、さらにハーバード大学を辞して障がい者共同体ラルシュに活動の場を移した。ヨーダーは平和神学を打ち立て、ハワーワスは弱さを受け止める教会論を発展させたが、ナウエンはそれらの課題を体験的に深めた。ヨーダーやハワーワスが、大学を場とし続けた点でいわば霊性を論じる神学に留まったことに対し、ナウエンはその生涯の歩みを通して霊性として神学を営むことを例証したことになる。

ナウエンはまた、崇高な理念だけで人間存在は満たされないという現実に向き合った。頭脳だけでなく身体を含めて人間であり、その身体性は皮膚の下に留まらず共同体的な広がりを持っている。すなわち、個々人の身体は他者との関係性によって規定され、形成されるものとして理解される。神はイエスとして受肉することで自身を啓示したが、ナウエンによるとそれは、「弱者」とされる人々と共に食卓を囲むことで神を体験的に知るためであった。すなわち「キリストの体」なる共同体は「キリストの体」を食す聖餐を通し、今ここでイエスを「目で見て、触るように」人々に示す存在だと理解される。

共同体性の育みと結びついたナウエンの聖餐理解は、現代神学とりわけ第二バチカン公会議に棹差すカトリック神学と通底する。そこでのナウエンの独自性は、制度としての教

会に還元されない有機的なものとして共同体性を理解し、身体性に根差した日常の霊性と称すべき次元を開示したことである。そして聖餐論や共同体論の組織的構築よりも、それらの体験を物語ることで思想を展開すること自体、主知主義的ではなく受肉的なキリスト教提示の実例を示している。

結論となる第六章では、ハワーワスら北米の神学者・キリスト教思想家の知見を、改めて日本の社会的・教会的脈絡に位置づける。それは、ハワーワスらの思想や実践がいずれもポスト・キリスト教世界へと進む北米における教会、とりわけその共同体性の復興を企図しているため、彼らの思想を日本に直接適用できないからである。そのことを踏まえ、論文全体の結論として以下が提示される。

現代日本のプロテスタント・キリスト教は、大木の「歴史神学」が社会的・教会的物語としての役割を果たすことを確認し、その上で次の三つのテーゼに沿ってキリスト教弁証の営みを進めていくことが求められる。「日本のキリスト教は自らの内に平和を生じさせる必要がある」、「日本の教会が弱さに価値を見いだす教会形成を進めるために、物語神学のパラダイムを理解してハワーワスの教会論に学ばなければならない」、「日本のキリスト教は身体性に根差した日常の霊性に目を向けることが必要である」。

本論文の章立ては以下の通り（章節のみ)。

第１章　序論
　第１節　本論文の目的：弁証の課題としての教会の共同体性の涵養
　第２節　大木の「歴史神学」とハワーワス、ヨーダー、ナウエンの意義
　第３節　本論文の構成
第２章　土台としての「歴史神学」：大木英夫
　第１節　本章の課題
　第２節　「歴史神学」の神学的構造
　第３節　大木の「歴史神学」の意義
　第４節　ピューリタニズムと大木神学の課題
第３章　平和神学の基盤となる教会的主体性の確立：ヨーダー
　第１節　本章の課題
　第２節　ニーバーと大木における戦争擁護の神学的構造
　第３節　戦争と平和をめぐるニーバー兄弟の神学的相違
　第４節　ヨーダーにおける終末論と非暴力の結びつき
　第５節　非暴力終末論の歴史的定位
　第６節　ヨーダーにおける教会の位置づけ
　第７節　ヨーダーの視点によるニーバーと大木
　第８節　本章のまとめ
第４章　人間の「弱さ」を踏まえた教会論：ハワーワス
　第１節　本章の課題
　第２節　自発的個人を前提とするピューリタン自由教会
　第３節　個人主義批判としてのハワーワスの障がい者論
　第４節　障がい者を包括する教会論的基礎

第５節　本章のまとめ
第５章　身体性に根差した日常の霊性：ナウエン
第１節　本章の課題
第２節　霊性家ナウエン
第３節　知性偏重から身体性へ：ハワーワスへの補完
第４節　平和の霊性：ヨーダーへの補完
第５節　日常の霊性としての聖餐論
第６節　制度的教会の相対化とその射程
第７節　本章のまとめ
第６章　結論
第１節　キリスト教弁証の土台としての「歴史神学」
第２節　現代日本でキリスト教を弁証していくための方向性
第３節　結語
参照文献一覧
おわりに